

退官記念講義

日本人と国際化

石 井 章

はじめに

1. 地図を逆さにして見る
2. 英語圏が世界の中心ではない
3. ラテンアメリカと日本人
4. 日本人の「国際化」とアジア
—南京大虐殺とヴァイツゼッカー演説—
おわりに

はじめに

最近のように「グローバリゼーション」（地球規模化）の傾向が強まるとともに、一国の枠内で物を考えるのではなく、全人類規模、地球規模で物をとらえることが必然となってきました。そして外国との結びつきがますます緊密になるに伴い、日本人の「国際化」ということが頻繁に語られ、「日本人はもっと国際化しなければならない」というふうに言われます。高知大学に「国際社会コミュニケーション学科」が作られたのもこうした文脈においてだと思われず。

ところで「国際化」、「国際化」と言われますが、その具体的な中身は何なのだろうか。英語が上手に話せることか。英語とかぎらず何らかの外国語をマスターして外国人と自由にコミュニケーションできることが「国際化」なのか。「国際化」という言葉からイメージするものは各人各様だと思います。私は「国際化」という言葉をここで定義するつもりはないし、「国際化」についての

私の考えを皆さんに押しつけるつもりは毛頭ありません。「日本人と国際化」ということに関して日ごろ私が考えていることをお話して、一つの問題提起としたいと思います。

1. 地図を逆さにして見る

普通われわれが地図を見る場合、世界地図でも日本国内の地図でも、北を上、南を下にして描かれた地図を見えています。そしてそのことに何の疑いも抱いていません。おそらく、世界の陸地が北半球に偏在し、したがって人類の多くが北半球に住んでいること、人類史上の主な文明が北半球に発生したこと（南米のアンデス文明を唯一の例外として）のために、地図を描くときには北を上にするのが定着したのでしょう。技術的に北を上にしなければならない必然性があるわけではなく、南を上にした地図だってあり得ます。南半球にある南アフリカかオーストラリアかアルゼンチンかの地図で、実際に南を上、北を下にした地図が作られているそうです。

私は一度だけそういう地図を目にしたことがあります。それは南半球ではなく、北半球のアメリカ合衆国においてです。アメリカのフロリダ州マイアミにフロリダ国際大学（Florida International University）があります。その大学にラテンアメリカ・カリブ・センター（Latin America and Caribbean Center）という研究センターがあって、そこを訪問したとき、入ってすぐ正面の壁に南北アメリカ州の地図が右ページのように南を上にした形で掛けられているのを目にしました。それは普通の地図をわざと上下逆さにして掛けたのではなく、南を上、北を下にした状態で文字も印刷してあるものです。そういう地図を特別に注文して作らせたのでしょうか。おそらくこれはラテンアメリカ・カリブ・センターのアメリカ人の研究者たちが、自戒の意味を込めて、こういう地図を掲げていたのだと思います。自分がアメリカ人として北側の世界の立場からラテンアメリカ・カリブを見ると、どうしても偏ったものを見方をしがちである。それを戒めるためにわざと南を上にした南北アメリカの地図を掲げたのでしょうか。



いま地図の南北の例をあげましたが、われわれはふだん見慣れているもの、やり慣れていること、自分たちにとっては常識であるものをもって、世界中どこでも通用する人類に普遍的なものとなしがちです。しかし実際に外国へ行って外国人と接し、異文化と接してみると、われわれにとって常識であったものが通用しなかったり、逆にいままで思ってもいかなかったことが向こうでは普通であったりしてびっくりすることがあります。そしてカルチャー・ショックを受けます。しかしカルチャー・ショックを受けるのは悪いことではありません。その後で、「これは自分には合わない。とてもだめだ」と拒絶反応を示すか、あるいは「これはおもしろい考え方や行動があるものだ。これにはどういう意味があるのだろうか」と興味を示して、そこから何かを学ぼうとするか、人によって違いがでできます。後者のような態度が「国際化」にとって必要だと思います。異なった文化や人間の行動に出会ったときに、興味を抱いて「どうしてこうなのだろう。これにはどういう意味があるのだろうか」と考えてみる。人間の行動であるからまったく無意味なことはなく、何らかの合理性があるはずですから。そこから何かを学び取ろうとする、そういう姿勢が大切なのではないのでしょうか。そこから異文化に対する理解、ひいては国際理解が生まれるのではないのでしょうか。

地図の南と北を逆さにして見ることに限らず、われわれがふだん当然と思ってやっているのと違うやり方をしてみると、思わぬ発見をすることがあります。上下逆さにして見る他に、裏側から見るとか、斜めに見るとか、逆回転させてみるとかです。たとえば時計の針は右回り（時計回り）に回転させることになっていますが、機械の構造上そう回さなければならない必然性があるわけではありません。左回り（反時計回り）に針が回る時計があってもいいと思っていたところ、実際にそういう時計を日本の喫茶店かレストランで目にしました。そういう時計をわざわざ作ったのです。世の中にはヘソ曲がりな人間がいるものです。

日本では皆が同じ行動をとることが望ましいとする風潮があつて、ちょっと変わったことをする人を、変わり者であるとか、ひねくれているとかいって排除する傾向がみられます。「凡人、軍人、変人」ではないけれど、世の中凡人

ばかりで構成されてははおもしろくありません。「変人」といわれるような人にも存在価値があります。

私の大学時代の友人に変わったことを考える男がいて、リンゴの皮を剥いて切るのに普通とは違ったやり方をしました。皮を剥いてから横に輪切りにしたのです。おもしろいと思って後で自分でもやってみました。そうしたら新たな発見をしました。リンゴの芯の部分がどうなっているのか、種がどういう配列になっているのかが分かりました。

このように普段と違ったやり方をしてみると、それまで気がつかなかった新しい発見をすることがあり、新しい世界が開けてくるものです。

外国へ出かけて行って異文化と接触することは、こういうことの連続です。「それは自分のやり方とは違う」といって排除するのではなく、「そういうやり方もあるのか」、「そういうものの考え方もあるのか」と興味を示す。そしてその意味を考えてみる。ときには自分もそれをやってみる。そういうことが「国際化」として必要なのではないのでしょうか。たとえばイスラム教の世界にはラマダンという断食月があります。日の出から日没までいっさい食べ物を食べないし飲み物も飲まない。イスラム圏から遠く離れた日本から見ると、随分変わった物好きなことをやっているように見えるかもしれませんが、それには意味があるからそういう行動をとっているのであって、一つの文化です。たまたまイスラム圏に滞在することになった人がいたら、異教徒であっても彼らと一緒にラマダンに参加してやってみる。あるいはイスラム教でもキリスト教でも聖地への巡礼という行事があります。これは純粋な宗教活動であるだけでなく、重要な社会行動です。異教徒であっても巡礼に参加してみる。そうすることによって彼らのものの考え方、生活感覚をある程度理解できるようになるのではないのでしょうか。

2. 英語圏が世界の中心ではない

「国際化」というと英語が上手に話せることだ、と思っている人がいるかもしれませんが。もちろん英語が自由に話せて、外国人と英語でコミュニケーション

ンできれば、そのことは「国際化」にとって有利な条件となることは間違いありません。しかしそれはあくまで一つの条件であって唯一絶対の条件ではありません。まして英語が話せる、ということと、「国際化」とはイコールではないのです。現代世界で広く通用する言語を仮に「国際語」と呼ぶならば、英語はいくつかある国際語のうちの一つです。現在国連の公用語は英語の他にフランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、アラビア語です。英語は「国際語」のなかで最も広く通用する言語であることは確かですが、だからといって英語が唯一の「国際共通語」ではないし、ましてや世界の「標準語」ではありません。

いうまでもなく英語は人工語ではなく、数ある世界の自然言語の一つです。英語が国際的に広く通用するようになったのは、人類の長い歴史のうちの比較的最近のことに過ぎません。それは19世紀にイギリス（当時の大英帝国）が世界の覇権国家であったことと、20世紀にはアメリカが覇権国家となり、いまでは世界で唯一の超大国であるという事実によります。なにも英語という言語が文化的に優れた言語だからではないし、世界の標準的な言語だからでもありません。

英語が人工語ではなく自然言語であるということは、その言語の背景にそれを使う国や民族の文化があり、世界観があることを意味します。もしわれわれが「英語が世界の共通語である」という認識をもち、その立場に立って行動したならば、英語は文化的に中立ではないから、どうしてもイギリス人やアメリカ人の、アングロサクソンの人たちの物の見方、世界観の影響を受けてしまうのではないか。英語圏が世界の中心であるかのような錯覚に陥ってしまうのではないか。そういう危険性を私は指摘したいのです。

私は長年アジア経済研究所に籍をおいて、発展途上地域の研究、とくにラテンアメリカ地域研究に携ってきましたので、その関連で話しを進めます。アジア経済研究所には「海外派遣員」といって、研究所に入って3～4年という若手の研究者を2年間現地に派遣する制度があります。発展途上地域の研究をするには二つの方法があって、一つはその地域についての研究が最も進んでいる先進国の大学なり研究機関へ行って対象地域について学び、それから現地に入

るという方法です。アフリカ研究であれば、まず旧宗主国のイギリスやフランスに行く。ラテンアメリカ研究に関してはアメリカが一番研究が進んでいるので、まずアメリカへ行って研究対象であるラテンアメリカについてあるていど学んでから現地に入る、という方法です。もう一つはそういう過程を経ずに直接現地に入る方法です。

アジア経済研究所の初代所長は東畑精一先生でしたが、この東畑所長の方針は「発展途上地域研究をする者はまず現地へ行け」ということで、海外派遣員は先進国を経ないで直接現地へ派遣されました。その趣旨は、まず現地へ行って現地の言葉を覚え、土地の人と生活空間を共有し、現地の食べ物を食べ、自分の眼で対象を見、感じる事が地域研究にとっては必要だ、というものです。私はこの東畑所長の方針は正しかったと思っています。ラテンアメリカ研究に関してはアメリカが最も進んでいます、最初にアメリカに行ってそこでラテンアメリカについて学ぶと、アメリカ人のものの見方、アメリカ人の対ラテンアメリカ観にどうしても影響されてしまう。それを戒め、まず自分の眼で現地を見ろ、ということだったので。

ラテンアメリカはかつてスペインの（ブラジルはポルトガルの）植民地支配下にありましたが、19世紀初頭という比較的早い時期に独立を達成しました。独立後は欧米の先進国の強い影響を受けます。20世紀に入ってから政治的・経済的に北米、アメリカ合衆国の影響を大きく受けます。アメリカは18世紀の後半にイギリスから独立して以後、領土を拡大し、急速に国力をつけ、19世紀後半には西半球（南北アメリカ州）における覇権国家としての地位を確立しました。そして20世紀には世界の覇権国家にまで駆け昇ります。一方ラテンアメリカは今日発展途上国の地位に甘んじています。アメリカ人がラテンアメリカを見るときに優越感を抱くのも分かります。どちらも同じ新大陸の国で、ヨーロッパの植民地であった。出発点は同じなのにこれだけ差がついてしまったのはなぜか。われわれがこれだけ発展しているのに彼らが低い段階にあるのは、彼らの文化が低いからではないか、と考える。アングロサクソンの文化に比べてラテンの文化は劣っているのではないか、英語圏の文化に比べてスペイン語圏の文化なんかは一段と低いのではないか、という偏見を抱きがちです。もし

われわれ日本人が英語圏の人々のものの見方を基準にして世界を見るならば、そういう偏った世界観にどうしても影響されてしまう。そういう危険性があることを指摘したいのです。

発展途上国というと経済的に発展が遅れている、貧しいところですが、そこは文化的にも遅れている、低い段階にある、というイメージを抱きがちですが、これはまさに偏見です。人類の異なる文化を比較して、一方が高いとか他方が低いとか何を基準にして言えるのでしょうか。経済であれば数値化して比較することができる。普通一人当たりのGDP（国内総生産）を数値で示して、それが高いところは発展した国、低いところは途上国とする。それぞれの国が世界のどの辺に位置するかを指標で示すことができますが、経済指標と文化とは結びつきません。

人間個人の場合に例えていえば、「偏差値」という高校や大学の入試のときにお世話になる数値があります。これは人間の能力のある一部を指標化したものであって、人間性や人格とはまったく関係ないものです。もし「偏差値の高い人は人格的に優れており、低い人は人格的に劣っている」などと言ったら、「馬鹿じゃないか」ともの笑いの種になるだけでしょう。それと似たようなもので、「経済的に貧しい国は文化的に低い」などと思うのはまったくナンセンスです。もしそう考える人がいたら、その人の文化的水準が低いのではないかと私は思います。

3. ラテンアメリカと日本人

私が最も長く滞在したのはメキシコですが、その後で中央アメリカのコスタリカにも2年間駐在しました。ここもスペイン語圏の国です。私と同じ時期に日本の国際協力事業団（JICA）の専門家として、地方の某国立大学（高知大学ではない）の名誉教授の方がコスタリカに派遣されてきました。農業経済の専門家で農学博士です。その人はかつて英語の通じるアジアの国で、同じような農業関係の国際協力の仕事に携わった経験があります。その人がコスタリカに赴任してきてどういう反応を示したか、といえば「コスタリカでは英語が

通じない」といって文句をいうのです。その人が英語ができて英語を使って国際協力の仕事をしてきた、それはそれでいいことですが、コスタリカが英語圏の国ではなくスペイン語圏の国であることは来る前から分かっていたはずです。

「英語が通じない」というが、その通じなさの程度においては日本もコスタリカも似たようなものです。アジアの某国で英語が通じるのは、その国がかつてイギリスの植民地であったからです。コスタリカはイギリスの植民地ではなくてスペインの植民地であったから、英語ではなくてスペイン語を話す、というそれだけの違いです。日本はどこかの国の植民地でもなかったから国内では一般の人は日本語のみを話すのです。イギリスの植民地であった国の人が英語を話すのは、その人たちが特別知的水準が高いからでも、勉強熱心だからでもなく、英語を使うことが生きるために必要不可欠であったからに他なりません。日本は教育の普及度、教育水準という点で世界でも有数の高いところにあります。文化の程度も同様です。英語を話す人の割合が少ないからといって、日本の文化程度が低いということにはなりません。

コスタリカに来ていた名誉教授の先生は、どうも「英語が通用しない」コスタリカの文化水準が低いというような偏見をお持ちだったのではないかと。国際協力の仕事で2年間スペイン語圏に滞在しながらスペイン語を覚えようとしないうのです。英語圏に比べてスペイン語圏を一段と低いものとみなし、スペイン語圏の文化なんかに興味を示さない。ゆきずりの旅行者だったらそれでもいいかもしれませんが、仕事で、しかも国際協力の仕事で駐在するのに、その協力対象国の言葉を覚えようとしないう。これは問題です。

その人が2年間の任期を終えて帰国する前に何といったかといえば、「私は喜び勇んで日本へ帰るんです」。これには驚きました。そんなにいやなのだったら、初めからコスタリカなんかに来なければいいのに。発展途上国の中でも生活条件の厳しいところに駐在しているのだったらそう言うのも分かります。たとえば国際的な経済制裁にあっているイラクであるとか、アメリカの経済封鎖にあっているキューバとか、非常に治安の悪いところ、内戦下のボスニアであるとか、アフリカの一部の国とか、常に身の危険を感じて暮らさなければならないような土地にいるのだったら、早く日本へ帰りたいというのも分かりま

す。しかしコスタリカはそのどれにも相当しません。生活物資が欠乏しているわけでもなく、治安がとくに悪いわけでもない。気候はいいし、人間は穏やかです。発展途上国の中では生活しやすいところですよ。そういうところで2年間暮らしていても日本へ帰りたくて、「喜び勇んで帰るんです」という。そういう人をJICAの専門家として発展途上国へ派遣するのは国費の無駄使いだと思います。一人の年配の専門家を派遣するのと同じ費用で、青年海外協力隊員を3人か4人派遣した方が日本の国際協力にずっと役立つでしょう。青年協力隊の人たちは、現地の言葉を覚え、現地の人と同じレベルの生活をしながら草の根の国際協力を実践し、国際理解を深めているのです。

誤解のないように言いますが、私は年配の人がすべてダメで、国際協力の現場に向かない、などと言っているわけではありません。年配の方でもシニア協力隊とかボランティア活動などで非常に有益な活動をし、現地の人から感謝されているという例はいくらもあります。ただ私がたまたまコスタリカで一緒になった某国立大学名誉教授の方はさきに述べたような考えの方でした。

今度はこれとは逆の例を一つあげましょう。いまから約2年前になりますが、1996年の12月にペルーで武装ゲリラによる日本大使公邸占拠事件が起きました。日本の大使をはじめ大使館員や日本の進出企業の駐在員やペルーの政府要人等が人質にとられ、120何日間、およそ4カ月余、非常に過酷な条件のもとで幽閉生活を強いられました。解放されて日本に帰ってきた元駐在員の中には、「もうペルーなんか懲りごりだ。二度と行きたくない」という人がいても不思議ではありません。それはごく自然の感情でしょう。ところが何人かの人は、「もし機会が与えられるならば、もう一度ペルーへ行きたい。そしてペルーのために仕事をしたい」あるいは「ペルーと日本との架け橋になりたい」と言うのです。嬉しいですね、そういう人がいることは。そういう人は本当にペルーが好きで、ラテンアメリカが好きで、ラテンアメリカの魅力にとり憑かれています。私のいう「国際化」した人とはこういう人のことです。

ラテンアメリカは一般に治安が悪いことで知られています。泥棒、強盗、スリ、ひったくりの類いの一般犯罪は日常茶飯事です。日本人の旅行者や駐在員で被害に遭った人は大勢います。私自身何回か被害に遭いました。しかしその

ことでラテンアメリカを嫌いになったりはしません。悪いこともあれば、必ず良いこともあります。ラテンアメリカはとても魅力的なところですよ。

私のアジア経済研究所の元同僚（同僚といっても私よりずっと年の若い男性ですが）で、どうして彼ばかりというくらい、よく犯罪の被害に遭う男がいます。犯罪ばかりでなく、メキシコでは地方を旅行中に乗り合わせた列車が転覆事故を起こして怪我をするという目にも遭いました。アルゼンチンに駐在していたときには、白昼拳銃を突き付けられて、現金やパスポートを奪われるという怖い目にも遭っています。しかし悪い事ばかりが起るわけではありません。彼は独身でアルゼンチンへ行ったのですが、アルゼンチン人の女性の中から生涯の伴侶を得ることができました。彼にとってそれまでの悪いことを補って余りある良いことがあったわけです。

ラテンアメリカへ出かけて行った日本人の独身男性で、現地の女性を妻にした人は何人もいます。ラテンアメリカ研究者や青年海外協力隊員で、そういう例を私は20件ぐらい知っています。また日本人の女性でラテンアメリカの男性と結婚した例もあります。最近2年以内にアジア経済研究所の若い女性3人が、1人はキューバ人、1人はペルー人、1人はベネズエラ人の男性とそれぞれ結婚しました。皆こういうかたちで国際交流を実践しているのです。

4. 日本人の「国際化」とアジア

—南京大虐殺とヴァイツゼッカー演説—

「日本人と国際化」を問題とする場合に、欧米世界との関係だけを扱うのでは片手落ちです。日本とは歴史的にも文化的にも関わりの深いアジアの近隣諸国との関係を視野に入れなければなりません。「私はラテンアメリカ研究者だからアジアとは関係ありません」では済まされません。アジアの近隣諸国と日本との関係は、過去の不幸な出来事を抜きにしては語れません。日本を一方の当事者として、中国大陸、東南アジア、太平洋地域で戦われた戦争、いま「アジア太平洋戦争」の名で呼ばれている戦争とその被害についてです。あれはもう半世紀以上前の過去のことでないか、と言われるかもしれませんが、まだ

半世紀しか経っていないのです。戦争の傷跡はいまなお消えていません。自分の目の前で肉親を殺された人や自分自身がひどい目に遭った人、従軍慰安婦にされた人等、肉体的、精神的に癒しがたい痛手を被った人がいま現にいます。50年、60年経ったから忘れ去られるものではありません。

私自身の経験に則して話をすすめます。私は1935年12月の生れですから、1945年の敗戦の10年近く前に生まれています。もの心ついたときには「戦争中」という時代でした。ただし私の場合は「戦中派」ではありません。戦中派というのは、男性の場合は兵隊として戦争に駆り出された世代、女性の場合は夫や兄弟や恋人が戦争に駆り出された世代をいいます。私の受けた教育は大部分が戦後教育です。敗戦のときには「国民学校」の4年生でしたから、4年生の1学期まで軍国主義の教育を受け、その後いわゆる「戦後民主主義」の教育を受けて育ちました。私の場合は子供ではありませんでしたが、子供として「戦争中」という時代を体験した世代です。「子供のころ戦争があった」世代と自ら命名しています。(参考文献 3)

日中戦争が本格化するのは1937年7月7日の盧溝橋事件以後ですが、事件当時私はまだ満2歳にもなっていませんから、もの心はついていません。もの心ついたときには日中戦争の最中でした。すでに日中戦争が泥沼化して後戻りできないような状態になっていました。子供向けの絵本などにも戦争色が強まってきます。日本の兵隊が勇ましく戦っている絵などが描かれ、そこに「国の守り」という言葉が書いてある。「兵隊さんがこうして勇敢に戦って日本の国を守ってくださっているから、銃後の皆さんは安心して暮らせるのですよ」というようなことが書いてある。しかしまだ幼い子供であった私でも、これは少し変ではないかと思いました。外国の軍隊が日本に攻め入ろうとしてきたときにそれを迎え撃つのなら、「国の守り」という表現が正しい。たとえば鎌倉時代の元寇のような場合がそうです。しかし日中戦争の場合はそういう状況にはない。当時は「日中戦争」という言葉はまだなくて「支那事変」と呼んでいました。中国のことを「支那」と呼んでいた時代です。「支那」の兵隊が日本を侵略しようとして攻めてきたわけではない。逆に海を越えて向こうに攻め込んでいるのは日本の軍隊なのだ。どうしてこれが「国を守る」ことになるのか、ま

だ学齢前の幼児でさえ疑問に思いました。つまり国民を十分に納得させるような説明のつかない戦争、きたない戦争をやっていたのです。

中国本土に深く攻め入った日本軍は次々と主要都市を陥落させ、37年12月には当時の中華民国（国民党の蒋介石政権）の首都が置かれていた南京を占領します。そして12月13日にいわゆる「大虐殺」事件が起こりました。当時の日本国内の反応はどうであったかといえ、虐殺事件のことなど国民にはいっさい伝えられませんでした。中国の大都市を占領するたびに、お祭り騒ぎをやり、提灯行列をやって勝利を祝っていたのです。「日本軍は強い。次々と華々しい戦果をあげ、[支那]の大都市を占領する。勝った、勝った。万歳、万歳。」と、日丸の旗を振って喜んでいたので、これは今日街頭宣伝車を繰り出して大声を上げるようなやや特殊な人たちではありません。ごく普通の身近な人たち、善良な日本人が「勝った、勝った。万歳、万歳。」と喜んでいたので、これは事実です。戦後生まれの方、戦争を知らない世代の方は是非ともこの事実を知っていただきたいと思います。

日本国民が「勝った、勝った」と喜んでいた一方で、中国ではどんなことが起っていたのでしょうか。多くの罪のない非戦闘員が殺され、そして生き残った人たちも堪え難い苦痛を味わわれました。その人たちの苦痛はその時点（1937年）で終わったわけではなく、その後もずっと続くのです。戦争中、一般の日本国民はそういうことを知らされていませんでした。南京大虐殺について語られるようになったのは、戦後もすぐではなく、しばらく経ってからです。細菌戦部隊（七三一部隊）についても、従軍慰安婦の問題についても同様です。ところでわれわれ戦後の日本人はそういう問題にどれだけ関心を持ち、その被害者の痛みを思ったのでしょうか。被害者といってもそれは大地震や洪水のような自然災害のそれではありません。日本国家の行為として隣の国に正規の軍隊を、それも大軍を送り込んで、指揮官のもとに軍事行動をとった、それによって生じた被害なのです。

昨年12月14日、南京大虐殺に遭遇して辛くも生き延びたという中国人女性が高知に来て当時の状況を証言する集会が開かれました。またとないいい機会だと思い、私はそれに出席しました。高知在住の中国人留学生が通訳してくれ

ましたが、その女性の話を聞くと実に痛ましいものでした。家に押し入ってきた日本兵によって目の前で両親を殺されてしまう。そして彼女自身は日本兵によって犯されてしまったのです。彼女は1931年の生まれで、私は35年生まれですから、私といくつも違わない年代です。1937年の事件のときにはまだ満6歳でした。そんな6歳の幼女まで暴行されたのです。これは立場を逆にして考えてみればみればいいでしょう。もしどこかの外国が日本を侵略して、外国の兵隊がわが家に土足で上がり込み、銃剣で脅して自分の6歳の娘に暴行したとしたらどうだろうか。このように立場を逆転させてみれば、被害者の痛みも少しは分かるでしょう。

こういう話しをすると、「いつまでも過去のことにこだわるな」とか「日本の昔の悪いことばかり暴きたてるのは自虐的な行為である」、そういう歴史の見方は「自虐史観」である、とって批判する人がいます。しかし隣の国の人に大変な苦しみを与えた（「ご迷惑をおかけした」などという軽い表現ではとても表せません）、その被害者の痛みを思うことがどうして「自虐的」なのでしょうか。

被害者の痛みを思うどころか、まったく逆の立場から発言する人がいます。たとえば「南京大虐殺はでっちあげだ」というような発言があります。最近ではさすがに「でっちあげだ」という人はいませんが、「30万人も殺された、というのは大げさだ。実際の犠牲者は5万人とか3万人に過ぎない」などと言います。たとえ3万人であったとしても、3万人もの人を虐殺したというのは大変なことだと思いますが、とにかく「被害は言われているよりもずっと少なかった」と主張します。あるいは従軍慰安婦の問題については、「あの人たちは自分の自由意思で行ったのであり、何も悪いことではないのだ」というようなことを言います。これはある有力な政治家の発言です。また別の政治家で、1910年の日韓併合について「あれは日本国内の町村合併みたいなものだ」と言った人がいます。このように相手の神経を逆撫でするようなことを平気で言うのです。

こういう問題を考える際に、第2次大戦後のドイツの例が参考になります。戦後のドイツ（この場合西ドイツに限定されますが）は自らの手でナチの罪を

暴き、徹底した脱ナチ化、非ナチ化を図りました。そして戦争によって大変な被害を与えた隣国、ポーランドやフランスやロシアとの和解に懸命に努めました。そうした大変な努力の結果、近隣の民族からの信頼を得ることができたのです。そしてドイツの国際的な地位は高まり、いまやドイツはヨーロッパの中心的な地位を占めるまでになったのです。

ドイツの敗戦からちょうど40年経った1985年5月8日、当時の西ドイツのリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が議会で行なった名高い演説があります。「荒れ野の40年」の題で日本語に訳され、「岩波ブックレット」として出版されています。(参考文献 1) ヴァイツゼッカー大統領は、過去の出来事を「心に刻む」(erinnern) ことの必要性を訴えています。「心に刻むというのは、ある出来事が自らの内面の一部となるよう、これを誠実かつ純粋に思い浮かべることであります」。(『荒れ野の40年』11ページ) もちろんナチによるユダヤ人大虐殺、いわゆるホロコーストと、日本が戦争中に行なった行為を同列に論ずるわけにはいきませんが、大統領の言葉にはわれわれも耳を傾ける必要があるでしょう。「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」(『荒れ野の40年』16ページ、下線筆者)

最近日本では「歴史教科書見直し運動」というのがあって、中学や高校の歴史教科書で日本の過去の対アジア侵略や植民地支配の事実を教えるのはよくない、とくに南京大虐殺や七三一部隊や従軍慰安婦のことを教科書に記載すべきではない、と主張する人たちがいます。そういうことを教えると、若い人たちが「日本というのはなんて悪いことをした、いやな国なんだろう」と思って自分の国や民族に誇りを持てなくなる。だから教えるべきではない、というのです。たしかにそれはたいへん不幸な出来事であり、おぞましいことに違いありません。できれば触れたくないし、知らないで済まされるものなら済ませたいでしょう。しかし、そういうことに目をつぶることによって培われる民族心や国家意識とはいったい何でしょうか。それは隣人の痛みに思いをはせることな

く、隣の国との相互理解や友好を顧みない、自分の国や民族だけがよければいい、という考えであり、まさに「国際化」とは逆行する「国粹化」の動きに他なりません。最近一部ではありますが、こういう「国粹化」の動きがあることに私は懸念を抱いています。

若い人のなかには、いまここで私がお話したような出来事は自分が生まれる前のだいたい昔のことであり、自分とは関係ないと思う人がいるかもしれません。しかし昔といっても、豊臣秀吉の朝鮮出兵のような何世紀も昔のことではありません。それをはっきり記憶している人が現在おり、被害者にとってその苦しみはいまも続いているのです。

日本人の「国際化」といい、日本とアジアの隣国との関係を考えるとき、過去の出来事から目をそらすことはできません。もう一度ヴァイツゼッカー大統領の言葉を借りるならば「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる」のです。過去の出来事と向き合い、それをどうとらえるか、どう認識するかが大切です。そういうことなしにアジアの隣人とこれからの新しい関係を、信頼関係を築くことはできないと思います。

む す び

「国際化」とは英語がペラペラ喋れるようになることではありません。自国の文化や民族に拘泥して、その視点から世界や外国を見るのではなく、自国の文化を相対化してみる。一度向こう側に軸足を移してそこから世界を見る、あるいは向こう側から逆に日本を見る。そういうことができるようになるのが「国際化」であると私は考えます。その際、自分が生まれ育った文化においては常識であったものを一度疑ってみる。これまでとは違った判断基準でものを見る。そうすることによって新しい世界が開けてくるのではないのでしょうか。

はじめに「地図を逆さにして見る」と言いましたが、いつも北を上を南を下にして見ている世界地図を南北逆転して見ることによって、それまで気づかなかった別の姿が見えてくるのではないか。ヨーロッパとアフリカの関係を考えるのに、アフリカが上にヨーロッパが下にくるような位置で地図を見直してみ

る。アメリカとラテンアメリカとの関係を、ラテンアメリカが上に北米が下に
くるような位置で見る。日本とアジアとの関係では、フィリピンやインドネシ
アが日本より上にくるような位置で地図を見る。そうすることによって、また
別の世界が目の前に開けてくるのではないのでしょうか。

ご静聴ありがとうございました。

(本稿は1999年1月13日に行われた石井の「退官記念講義」をもとに、それに
若干手を加えたものである。)

参 考 文 献

1. 『荒れ野の40年 ―ヴァイツゼッカー大統領演説全文』岩波ブックレット No.55
1986年
2. 永井清彦『ヴァイツゼッカー演説の精神 ―過去を心に刻む』岩波書店 1991年
3. 石井 章『子供のころ戦争があった ―父から娘へ』人文書院 1984年